

現場ショールーム化を試行した イメージアップ活動の一事例

鹿島建設株式会社

○太田貴博*1

鹿島建設株式会社

野村保秀*1

鹿島建設株式会社

飯田清治*2

by Takahiro Ota, Yasuhide Nomura, Seiji Iida

建設工事はその特性上、地域環境に及ぼす影響は多大なものとならざるを得ず、施工法・施工機械の厳選など施工中の環境保全努力はもとより、地域住民の方々へのより一層の働きかけや積極的な広報活動が不可欠である。

当事例では、工事現場を“見せる”ことを基本方針に現場自体のショールーム化を試行し、地域住民がいつでも工事現況を確認できる状態にすることで、工事に対する安心感と理解の醸成に努めることとした。

常設のショールームとして、現場の一隅に多摩川の自然を模したビオトープ (BIOTOP) を設置し、自然学習の場並びに工事進捗状況確認の場として住民の方々に開放した。

現場周辺を流下する日野用水はかつてはホタルの群生地であり、地域のホタル復活運動と歩調を合わせカワニナの育成に取り組むなど、地域とともにビオトープの進化を見守っている。

ビオトープの開設以来、月に 50 名以上の方々が訪れており、工事関係者との間で自然から工事に関することまで多様な会話が生まれており、地域に根付いた工事として認められつつあるものと考えている。

【キーワード】 イメージアップ、コミュニケーション、環境

1. はじめに

建設事業、特に、土木建設事業は主に社会基盤整備を担う社会的に重要な事業であるが、その特性上、施工期間中の地域環境に及ぼす環境負荷は多大なものとならざるを得ず、静穏を望む地域社会との融和や住民の理解なくして円滑な工事進捗は望めない。

施工に当たって配慮しなくてはならない環境保全項目や考慮する面的範囲はともに拡大する傾向にあり、施工を担当する現場は各種法令の遵守はもとより施工法、施工機械の吟味や各種計測など可能な限りの

環境負荷低減に取り組んでいる。

一方、公共事業の発注者サイドにおいても施工段階での環境保全や住民への広報活動に注力しており、CCI 活動やイメージアップ工の計上など施工現場の環境改善や地域との融和を強力に推進しているところである。

本活動は従来の対応策に加え、企業者である東京都下水道局流域下水道本部と協議の結果、より積極的に現場を“見せる”こと、言わば現場自体をショールーム化し、地域住民の方々が常時工事状況を確認

*1 東京支店 八王子処理場工事事務所 0426-42-5355

*2 環境本部 地域環境計画グループ 03-5321-7322

認できる状態にすることで、工事に対する安心感と理解を醸成していくことを基本方針とした。

2. ビオトープの導入

(1) 導入経緯

具体的な“現場の見せ方”については議論百出の状態であったが以下の要因を考慮した結果、多摩川の自然を模した水辺の多様な生物環境を創造するビオトープ（BIOTOP）を設置し、常時開放することで自然学習の場並びに工事進捗状況確認の場として常設ショールーム化を図ることとした。

（導入要因）

- ① 対象現場は既設下水処理場内での増設工事のため、公園施設・緩衝緑地帯などが整備済みであり、環境ポテンシャルが高いこと。
- ② 近傍に 400 年の歴史を有する日野用水が流下しており地域のシンボリックな位置付けとなっていること。
- ③ 同用水はかつてはホタルの群生地であり、地元ではイベントを開催するなどホタルの復帰運動が盛り上がっていること。

ビオトープの設置位置は下水道局と協議の上、施工現場が望見できかつ安全性が保たれる場所とした。

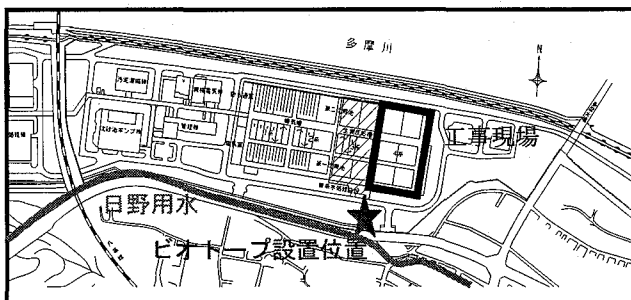


図-1 ビオトープ設置位置図



写真-1 ビオトープ全景写真(後方に施工現場を望む)

(2) 施設計画

ビオトープの計画にあたっては、既設処理場内の樹木や草原など既存の環境を有効活用し、また多摩川など回りの自然との連携を図る形で整備を行うことで生物多様性空間を創出することとした。

表-1 ビオトープ緒元表

施 設 名 称		八王子処理場現場 イメージアップビオトープ
工 期		2001.9.20～10.4
全 体 面 積		400 m ²
池	面 積	10 m ²
	最深部深さ	50cm 程度
水路	幅	50cm 程度
	延 長	30m
	流 入 水	建設現場湧水
放 流 先		日野用水
初 期 導 入 生 物		ウグイ・フナ・ドジョウ・カワエビ・ メダカ・カワナナ等

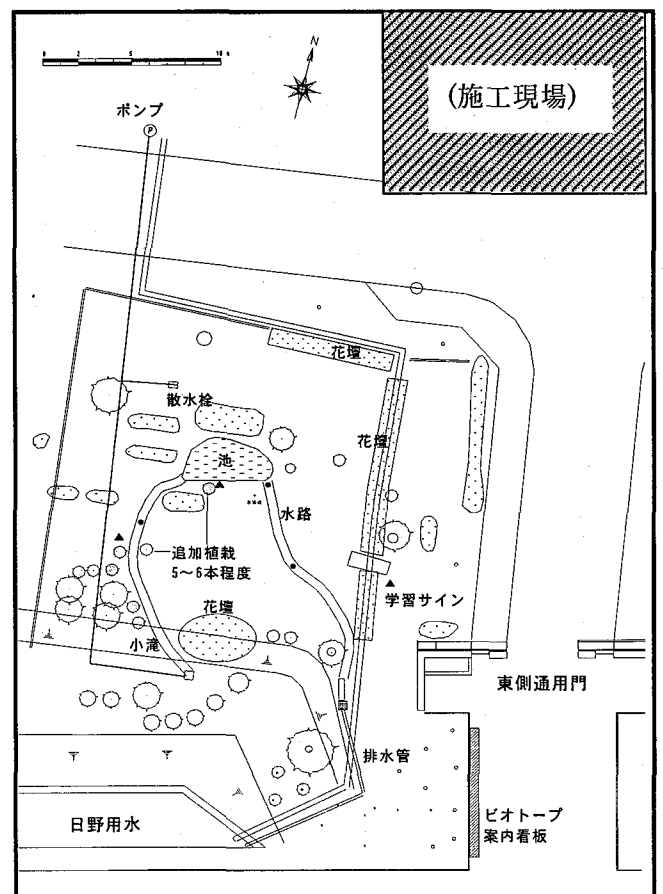


図-2 ビオトープ全体平面図

①水辺の計画

ビオトープエリア内に面積 10 m²程度の池及び延長 30m程度の水路を整備し、隣接の建設現場湧水を

導入した。この池及び水路に多摩川周辺に棲む水生生物を放流することで現場から排出される水の安全性を確認できる場としての役割も兼ねている。

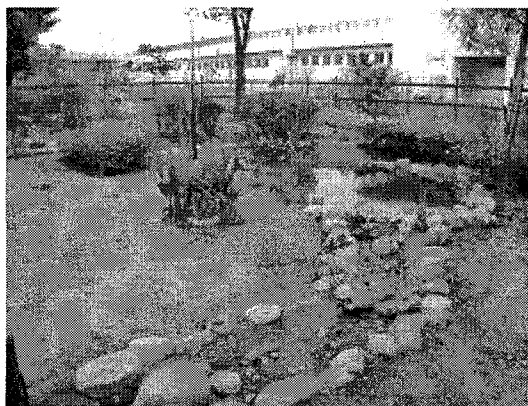


写真-2 池及び水路の様子

②植栽計画

基本的に既存樹木の有効利用を考えた植栽計画を行い、追加植栽としては動物誘致を目的として、実のなる木を数本程度、花期の長い草本類を数十株程度植栽した。また、池や水路には水際植物を多数植栽し、水辺環境の多様性を図った。

③環境学習計画

このビオトープ施設が、自然学習を行える場として利用される事を目的として、自然学習サインの整備を行った。このサインは、自然の不思議さ・面白さをわかりやすく説明したものや、このビオトープが果たす役割を解説したもので、J V職員により随時更新を行っている。J V職員の手作りで内容作成を行うことでJ V職員自身の環境に対する意識向上にもつながっている。



写真-3 自然学習サイン

(3)施設利用案内

ビオトープの常時一般開放については地元町内

会を通じて広く周知するとともに、現場ゲート前面に案内看板を設置し見学歓迎の姿勢を示した。

一般開放基準は、安全管理の都合上現場稼働日の昼間時間帯とした。

＜施設の一般開放時間＞

月～金曜日及び第1・第3土曜日
(ただし、工事休業日は除く)
9:00～16:00



写真-4 工事ゲート入口ビオトープ案内看板

施設開放後はコンスタントに来訪者があり、住民の方々に好意をもって迎えられたものと理解している。

来訪者の対応は主にゲート警備のガードマンに委ねているが、自然環境に興味を持つ人間を固定化することで特に支障は起きていない。

3. 現場見学会の開催

より積極的に現場を“見せる”という基本方針の下、更なるイメージアップの一環として施工現場全体を開放したイベントを開催することとした。

イベントは“ふれあい建設パーク”と銘打ち、東京都下水道局が主催し、共催として八王子処理場対策協議会（地元住民組織）並びに施工共同企業体が参加し、文字通り事業主・地域・施工の3者が一体となって開催した。

現場としては、足場や支保工が林立する施工最盛期の現場の全面開放であったため、特に安全対策に細心の注意を払うとともに建設工事の面白さ、わくわく感を満喫していただくべく趣向を凝らした。

また、イベントの周知にあたっては地元町内会等の組織に全面的に協力していただき、当日は約1,000名の入場者を迎えることができた。



写真-5 イベント入場ゲート

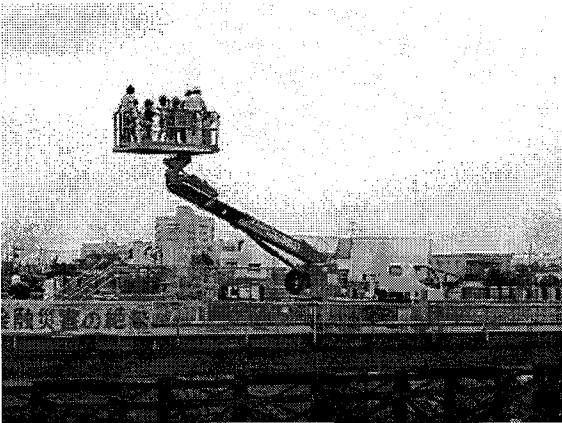


写真-6 高所作業車試乗

4. おわりに

現場ショールーム化を目指し各種取り組みを試行してきたところであるが、所期の目的は少なからず達成しているものと考えている。

ビオトープには月当たり50名以上の来訪者があり、工事関係者との間でホテルやカワニナ、バードウォッチングなど自然に関する事柄や、工事の進捗状況、今後の計画など多岐にわたる会話が交換され、地域の工事として認識されつつあるものと考えている。

今回の事例は、既設処理場の増設工事であり立地に関する基本合意は成立しており、敷地的にも余裕があったことから各種活動が有機的につながり地域との融合が可能となったものと判断される。

一般的には現場毎に特殊な要因があり画一的な地元対策を見出すことは困難であるが、本事例で試行した“現場を見せる”という手法は地域との融合のみならず、一般の方々、特に、子供達に些少ながら物作りに対する興味を喚起できたのではないだろうか。

以上

AN ACTIVITY ON THE IMAGE IMPROVEMENT BY “SHOWROOM EFFECT” IN A CONSTRUCTION SITE

by Takahiro Ota, Yasuhide Nomura, Seiji Iida

On the basis of its characteristic, a construction work considerably influences the regional environment physically and emotionally. Therefore, it is indispensable to make an effort on saving the environment by appropriate choices of the construction methods and machines, and also considering the positive communication and publicity with and for the community.

In this project, it has been tried to show the construction site to the regional residents by making the site as a “showroom” expecting to give them a sense of security and to deepen their understanding by virtue of the condition in which they can check the state of the project at any time.

A biotope, which imitates the nature of Tama River, has been established at a corner of the site, and it has been opened for the community as a place to learn the nature and to confirm the construction progress. It follows the regional activity on the revival of the fireflies and the authors are observing the evolution of the biotope together with the regional people.

The number of monthly visitors has been more than 50 since the opening of the biotope, and the visitors can communicate with the site people discussing the nature, the construction project, etc. The project is getting recognized as a work takes root in the community.